

---

# 魔法少女リリカルなのは StrikerS とある騎士王の物語

刹那

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

魔法少女リリカルなのは      Strikers      とある騎士王の物語

### 【Nコード】

N8487V

### 【作者名】

刹那

### 【あらすじ】

古代ベルカ諸王時代

其れは天下統一を目指した諸国の王による戦いの歴史

《聖王女》オリヴィエ

《霸王》 イングヴァルト

《冥府の炎王》 イクスヴェリア

そんな時代を生きた王族の人間である

しかし其処にはもう1人の王が居た

其の名は《騎士王》 アルトリウス

彼は他のどの王よりも強く、誰よりも誇り高かった。

そんな彼は短くも其の生涯に幕を閉じた。だが何の因果か彼は生前の記憶を持って転生した。彼は新たな命で何を思い、何を以て力を振るうのか？

この小説はご都合主義や台詞や文の引用、原作キャラが不遇な扱いを受けるといったこともあります。「原作キャラをもっと大事に！」  
等こつというの嫌いな方はバックを推奨します。  
其れでも大丈夫！という方のみお願いします。

読者様の意見により、再び感想の制限を無くします。何度もすみません！

memory:0 終わりは始まりに(前書き)

読者様からアドバイスがありましたので修正を。

アルトリア アルトリウス

Memory・0

終わりは始まりだ

これは1人の王の……

記憶のほんの一部……

けれど何よりも……

大切な……

思い出だった

。

《戦争》。

それはどんな世界にも必ず一度は起こる、

悲しい出来事。

私利私欲の為に戦争を起こす者も居れば、

ただ国を…民を護らんと、自らの力を振るう者も居る。

そんな文字通り戦って争う世の中で、彼等は戦っていた…。

《冥府の炎王》イクスヴェリア。

《霸王》イングヴァルト。

《聖王女》オリヴィエ。

そして

《騎士王》アルトリウス。

この4人の王達は自他共に認める強者で在り、

国民達からも慕われていた…もっとも優れた王達で在った。  
。

「とある国の政務室では」

？「今回の戦、被害はどれぐらいですか？」

？「はい。戦死者は約1200、負傷者は軽傷の者が約200、重傷の者が約700名となっております。」

？「そう……。」

そう言って目を閉じる紅と翠の虹彩異色の女性。

其処へ

文官「オリヴィエ様！」

1人の文官がやって来た。

オリ「どうしたの？」

其れに対して冷静に問い掛けるオリヴィエと呼ばれる女性。

文官「はい……、『騎士王様』、『霸王様』、『冥王様』が御見えに

なりました。」

オリ「!?!?.....ならば直ぐに此方へ通してください!?!?。」

文官「はっ!今直ぐに。」

オリヴィエの指示を受け、直ぐ様部屋を退出していった文官。  
暫くして、

?「オリヴィエ、入っても宜しいでしょうか?」

ドアの向こうから女性のものと思われる声が聞こえてきた。

オリ「ええ、大丈夫です。」

其の声を聞き、政務室へと入ってきた3人の人物。

オリ「久しぶりですね？騎士王。」

？「止してください。貴女も私も、『クラウド』や『イクス』も…。私達は“仲間”でしょう？そんな他人行儀な呼び方は…。」

クラ・イクス「そうだ/そうです。」

と微笑む様に述べる人物：《騎士王》こと『アルトリウス』、《霸王》こと『イングヴァルト』、《冥王》こと『イクスヴェリア』。

オリ「そう…ですね……。あっ！立ち話もなんですから、座りながらでも。」

何を想っているのか…少し目を閉じた後、席を促すオリヴィエ。其れに礼を言つて席に座る3人の王。

アル「オリヴィエ…、先ほど文官達から聞きましたが…。」

オリ「…はい。今回の戦、少し…いや、結構な痛手を負いました。」  
悔しげに唇を噛むオリヴィエ。其れだけオリヴィエにとっては国民  
や兵達は大切なのだ。いや、オリヴィエだけではない。此処に居る  
アルトリウスもクラウスもイクスヴェリアにとっても同じこと。  
現に3人とも苦い顔をしている。

クラ「このままでは街にまで被害が及ぶ。」

イクス「其れに兵達の士気も下がってきている…。このままでは何  
れ全滅ということも…。」

クラウスとイクスヴェリアも神妙な面持ちで意見を述べる。  
其れだけ状況が悪く成ってきているのだから…。

アル「ハア…。何時から貴方達は其処まで弱気になったのですか？」

アルトリウスの言葉に反応する3人の王。

アル「何があるうとも国を、国民を護るのが王としての務め。其れ  
が出来なくて何が王か!？」

王ならばどんな屈強に立たされようとも自らの信念を貫き通す…、  
其れが王というものだろう!？」

アルトリウスの想いを聞いた3人の表情には覇気が戻ってきた。

オリ「そうですね! 私達は王…。国民を護る為に戦うんです! 逃げる訳にはいきません!！」

クラ「ああ…、僕だって国を捨てて逃げるなんて王として出来る訳はない!！」

イクス「私も…、民を…いえ、家族を見捨てるなんてこと出来ません!！」

口々に自分の想いを述べていく。自分達は王…。  
国民を、強いては国全体を背負っているのだ…。  
初めから敗けると考えて逃げるなんて臆病者のすること…、だから戦う。

アル「…決まりですね?」

オリ・クラ・イクス

「はい! / ああ! / はい…!」

アルトリウスの問いに3人の王は力強く頷く。

アル「ではこれより、《聖王》・《霸王》・《冥王》・《騎士王》  
による連合軍を組織することを此処に宣言する!」

こうして4人の王は力を合わせて戦うことを決意する。

連合兵 1

「くそ!」のままじゃ...!ぐあっ!」

連合兵 2

「ぎゃあっ!」

連合兵 3

「うわああー!」

連合兵 4

「このままじゃ……!」

最初は優勢だった連合軍も徐々に押され、其の数を減らしていった……。

連合兵 5

「くそ! 誰か救護兵を頼む!」

連合兵 6

「!?! 危ない!」

1人の兵士が叫ぶ。其の先には今まさに後ろから斬られようとしていた兵士が居た。

連合兵 7

「えっ?」

其の声に後ろを向くが既に剣が振り下ろされようとしていた。  
だが其処へ

アル「ハアーーーーー!!!」

銀の騎士甲冑を纏った騎士王が其の手に持つ不可視の剣《インビシブル・エア風王結界

》で敵を斬り裂く。

連合兵

『アルトリウス様!?!』

アル「聴け!兵士の者達よ!!我らは国を護る為に戦っているのだ  
…!此処で死ぬこと、このアルトリウスが許さぬ!!」

連合兵 8

「そつだ、俺達はこんな所で敗ける訳にはいかないんだ…!」

連合兵 9

「俺、この戦いが終わったら彼女に告白するんだ!だから絶対に生

き残ってみせる！」

「俺も！」

「死んで溜まるか！」

「生き残ってやる！」

兵士達からはそんな言葉が聞こえてる。

アル「そうだ！再び立ち上がり我らの力、国民達に魅せるのだ！！」

「オオーー！！！！！！！！」

アルトリウスの呼び声に再び士気を上げる連合軍の兵士達。

連合兵 9

「アルトリウス様！オリヴィエ様が！」

1人の兵士がアルトリウスの下へ駆け込んで来た。

アル「！！！？其れは本当ですか！？」

其の報告にアルトリウスは焦り出す。

連合兵<sup>9</sup>

「は、はい！彼方の方で。」そう言って一際激しい場所を指す。

アル「くっ！（オリヴィエ…！待っていてください！今すぐ助けに行きます…！）」

アルトリウスは直ぐ様オリヴィエの居る場所へと駆け出して行った。

視点」

「オリヴィエ

くっ！早まりましたか！？

オリヴィエは1人で数百人を相手して戦っていたが、長い時間休ま

ず戦っていた所為か流石に体力も限界に近かった。其れに自らが持つ《聖王の鎧》に過信し過ぎていたことも……………。

だからだろう　　自分に近づいている危険に気付けなかったのは。

オリヴィエは「あつ。」と呟くも時すでに遅く、防御も回避も出来なかった。

（ああ　　私は死ぬのですね？　　後は頼みましたよ、アルトリウス…………。）

そしてオリヴィエは己の死を受け入れた。

しかし何時まで経っても痛みは来ない。オリヴィエは不思議に感じて目を開けた。だがオリヴィエの視界に映ったのは信じられない光景だった。

オリ「アルト…リウス…？」

目の前に映ったのは、オリヴィエにとっては何よりも大切なアルト

リウスが

オリ「あ……ああ……！」

自分を庇って剣を突き刺された姿だった

。

「  
アルトリウス視点」  
私が視界に捉えたのは今にも剣を突き刺されようとしていたオリヴ  
イエの姿だった。

アル（くっ！間に合え……！！！！！！）

私は咄嗟にオリヴィエの盾になった。

オリ「アルト……リウス……？」

アル「オリヴィエ……良かった……貴女が無事で……。ホントに良かった……。」

アル「ごほっ！」

私は堪らず血を吐いてしまう。

オリ「アルトリウス！貴方は何故……！？」

そんなこと……

アル「そんなこと……貴女を……護りたいからに決まっているじゃないですか……！」

オリ「アルトリウス……！？アルトリウス……！」

けれど私は体に力が入らず倒れてしまった。  
オリヴィエが私の名を叫ぶ。 だけでもう

オリ「アルトリウス！アルトリウス！しっかりしてください！アルトリウス……！」

オリヴィエは何度も何度も私の名前を呼んでくる。

アル「オリ……ヴィエ………お願いが あります。」

オリ「そんなこと 言わないでください！まだ……！まだ私は貴方と一緒に居たいんです！だから……！そんなもう死ぬみたいなこと 言わないでください……！」

アル「オリヴィエ そんな顔をしないでください…。美しい顔が台無しですよ？」

私はオリヴィエの涙を拭いながら言う。

オリ「ッ！アルトリウス…貴方は 卑怯です…！」

彼女は顔を赤らめ、ジト目で見てくる。

アル「オリヴィエ 私はもう逝きます…。貴女はどうか良き王として国民と共に生きてください。この大地がもう戦で枯れぬよう…青空と綺麗な花を何時でも見られる様な そんな国を」

オリ「…はい…！」

是で良い…是で私も安心して逝ける。そして私は最も大事なことを伝えよう

アル「オリヴィエ もうひとつ…貴女に伝えたいことがあります…」。

ああ　　視界が霞んでいく。だけれど是だけは伝えたい。

アル「オリヴィエ…私は貴女を　　オリヴィエを愛している

」

其処で私の意識は途切れた

memory.i

目覚める騎士王(前書き)

此方も修正!修正!

懐かしい夢を見た。

其れは私の生きた証。

そしてオリヴィエに

私の名前はアルトリウス。ベルカに生きた騎士王だ。  
其の私は一度死んだ。彼女のオリヴィエの傍で。だが何の因果か私はこうして朝を迎えている。

簡単に言えば転生だ。理由は良く分からない。

そして偶然かどうか知らないけれど私が今居るこの世界は私の時代から時が経ってはいるが同じ世界らしい。この世界は複数在って、私はその中の‘第1管理世界’ミッドテラダと言う所に居る。

最初は色々有りましたが今では何とかなってます。この世界で生きていく為に色々なことを調べた結果、此処ミッドチルダでは《管理局》なるものが在り、その管理局が管理（私にとっては支配も同義）している世界を‘管理世界’、していない世界を‘管理外世界’と呼ぶらしい。

私は気に入らない。管理と言っていないがらにやっていることは違法研究で人や動物を攫い、モルモットにする。違法なことや殺しをやっているながら奴らは平気な顔をしている。だから私は違法研究をしている場所を片っ端から潰していった。無事な子供等は孤児院に預ける。無事ではない者は……殺した。しかし後悔はしていない。苦しんでいるのなら救う。其れがたとえ殺すことになっても……私は見捨てない。

そんなことをやっていたらいつの間にか‘S級次元犯罪者《騎士王》’等と呼ばれている。所詮自分達に都合が悪くなると犯罪者扱いだ。其れがたとえ子供であろうともだ……！

私と同じS級次元犯罪者の『ジェイルスカリエッティ』も元は管理局の違法研究で造られ、今では立派な犯罪者扱いだ。だが奴自身もやっていることは人体実験……許せる訳ではない。

私は時々奴の機械通称『ガジェット』を相手している。《AMF》と言ったか……まあ私にそんなものは効かないが……。

是が私の今の現状だ。

？「アルトリウス！」

？「アルトリウス君！」

ん？この声は……

アル「アリサとすずかじゃないですか、どうしました？」

彼女達は『アリサ』と『すずか』。私が偶々行った、第97管理外世界《地球》、と言う所で管理局員に襲われているのを助けました。何故か彼女達からは魔力を感じたので調べたら案の定が在りました。《リンカーコア》とは魔法を扱うのに必要不可欠。そもそも無ければ魔法を使うことが出来ません。

彼女達から話を聴くと、「我々に付いてきて貰おう」と突然襲われたらしい。

やはり管理局は好かん。

助けた後私が10才の子供：其れも男と知った時、とても驚かれた。何故でしょうか？（自覚無し）

アル「其れで何か用ですか？」

すずか「うん、情報が入ってね。《レリック》が見つかったよ…。」

アル「其れは…場所は何処ですか？」

すずか「エイラム山間丘陵地帯の山岳リニアールで移動中。けど其処にガジェットが襲って来てコントロールを奪われたみたい。」  
アリサ「後其処に《機動六課》って言うのが来て交戦してるみたいよ？」

すずかにアリサが報告する。

アル「機動六課 ね…。」

《機動六課》。

最近試験的に運用され始めた部署、正式名称「古代異質物管理部機動六課」。

確か其の部隊の設立者は……

アル「アリサ、すずか。確か其の部隊の何人かは2人の知り合いでしたよね？」

アリサ「そうね…。」

すずか「うん。でも、私達は管理局の闇を知ってしまった…もうなのはちゃん達とは一緒には居られない…。だから私達は戦うよ。其れがたとえ、なのはちゃん達と敵対しようとも…。」

アル「そうですか…残りの2人はどうしてますか？」

すずか「残りの2人は今は別の世界で違法研究所を破壊しに行ってるよ」

アル「そうですか。分かりました。なら私は行きます。2人はどう

しますか？」

私は2人にどうするか聞きます。

アリサ「私は行くわ。」

すずか「私も行くよ。」

アル「なら急ぎましょう。2人とも、バリアジャケットを展開してください。」

アルトリアは2人にバリアジャケット展開を指示する。

アリサ「分かったわ。…『ソル』、バリアジャケット展開お願いね？」

アリサは自分のデバイス『ソルブレイズ』愛称は『ソル』にバリアジャケット展開を指示。

ソルへ了解。スタンバイレディ、セットアップ！

ソルの掛け声と共にバリアジャケットが展開されていく。  
アリサバリアジャケットは全体的に赤でスカートが短く、袖が長く  
白いラインが入っている。（見た目は真・恋姫無双の呂蒙）

すずか「こっちもバリアジャケットお願いね、『ルナ』」

此方も自分のデバイス『ルナエンペラー』愛称は『ルナ』にバリアジャケット展開を指示。

ルナ「了解 スタンバイレディ」セットアップ」

ルナはソルと違ってやや間延びした声でバリアジャケットを展開していく。

すずかのバリアジャケットは白い巫女装束で此方は逆に袖の部分が黒い。

アル「では行きましょう。」  
そう言ってアルトリウスは自分達を中心にベルカ式の魔方陣を展開。魔方陣が一際輝き、次の瞬間もう其処には3人の姿は何処にも無かった。

六課視点」

なのはSide

突然だけど私の名前は高町なのは、機動六課のスターズ分隊の隊長をやっています。今は私はリックを確保する新人達《FW》フオワードの道を開く為に飛行型のガジェットを倒している所です。

なのは「此方スターズ1。飛行型ガジェット全機撃破完了、新人達の援護に回ります。」

私は通信担当のシャーリー、本名「シャリオ・フィニーノ」に現状報告する。

「シャー、そうですね……じゃあ……！？大変です！なのはさんの所に転移反応……魔力反応3つ。魔力量は そんな！？この魔力量は……。」

なのは「どうしたのシャーリー？」

私は驚くシャーリーに問い掛ける。暫くするとシャーリーはとんで

もないことを言ってきた。

シャ「3つの内2つは《SSランク》、もう1つは……………《SSSランク》です。」

『!?!?!?』

私を含めた全員が言葉を失う。《SSランク》、《SSSランク》。どちらも管理局内ではトップクラスのレベルだ。

其中で私は空戦S+、私の親友の『フェイト・T・ハラオウン』  
フェイトちゃんも同じ空戦S+、もう1人の親友『八神はやて』  
はやてちゃんは総合SS。だけど今聴いただけでも 少なくとも  
私達よりはランクは上……そんなのがいきなり現れるなんて……………!

34

シャ「なのはさん! 3つの魔力反応がそっちに急速で接近してます、  
気を付けて下さい!」

少しして私の前に姿を現す仮面を付けた3人の女性(?)。

1人は金色の髪を頭の上で纏めて銀色の騎士甲冑を身に付けた、お  
そらく今噂の『S級次元犯罪者《騎士王》』だ…。

もう1人は同じ金色の髪をウェーブにしてバリアジャケットはチャ  
イナ服の様な感じで初めて見る人だ…。

最後の3人目は青色の髪を同じくウェーブにしてバリアジャケットは巫女装束。この人も初めて見る人だ…。

でもどうしてだろう？あの3人の内、2人には何故か見覚えがあるんだけど…。

「アルト

リウス組視点」アルトリウスSide

あの茶髪をツインテールにしている女性…どうやら此方を観察しているようです。このままレリックを確保したい所ですが警戒している様ですし、どうしたら…。

35

アリサ【アルトリウス、先に行つて。なのはは私とさすが相手を  
するわ だから早く行って。】

アリサが私に捻話で先に行く様に言ってくる。

アル【…分かりました。其方も大丈夫だとは思いますが気を付けて  
ください。】

此処はアリサ達に任せて私は先を急ぐことにします。

アリサ&amp;mp・すずかSide

【アルトリウス、先に行つて。なのは私とすずかが相手をするわ だから早く行つて。】

私は捻話でアルトリウスに先に行く様に言った。私の言葉を聞いて少し考えた後、【∴分かりました。其方も大丈夫だとは思いますが気を付けてください。】と言って先へと行く。

其処へ

なのは「行かせない！レイジングハート！」

RH了解。アクセルシューター

なのは「アクセルシューター、シュート！」

なのはがアルトリウスに向かって攻撃したのを見て、

アリサ「させない。フレイムランス！」

ソル「フレイムランス！」

私は炎の槍『フレイムランス』を発生させて、なのはのピンクの魔力球に当てて相殺する。

なのは「どうして邪魔をするの？」

アリサ「別に理由なんて無いわ。」

なのは「じゃあ…！」

すずか「ただアルトリウス君の邪魔をされない様になってというのが理由かな？」

すずかがなのはの言葉を遮って言う。

なのは「なら貴女達を倒して向かう！」

アリサ「出来るものならやってみなさい！【行くわよすずか！】」

すずか【うん、そっだね】

私はすずかに捻話で合図をする。すずかも了解の返事を返してきた。

さあなのは、私達相手に何処まで出来るのか楽しみだわ  
々頑張りなさいよ？

精

m e m o r y : i 目覚める騎士王（後書き）

次回は主人公側のキャラクター設定です！  
少しだけ修正入ります。

## キャラクター設定Part 1 (前書き)

前の修正版。

アルトリウスってリオレウスみたいでカッコいい……！似てないと思うけど、響きのにちよつと……。

残りの2人は出てからにします。

## キャラクター設定 Part 1

名前：アルトリウス・ペンドラゴン

性別：男（の娘）

年齢：10才

好きなこと／人：料理、読書、鍛練／オリヴィエ、クラウド、イクスヴェリア、アリサ、すずか etc……

嫌いなこと／人：女装させられること（トラウマ）／人  
人というか管理局全体、スカリエッティ、私利私欲の為に行動する者

デバイス：エクスカリバー（アームドデバイス）

魔力光：金色

術式：真聖古代式

エンシェントヘルカ

レアスキル：耐魔力（AMFみたいなもの）

備考：古代ベルカを生きた《騎士王》。オリヴィエを庇って死んだ筈が新たに生を受け、時を遡り転生。

ランクは《SSS》。

見た目が女性そっくりな所為か、よくオリヴィエやイクスに女装させられていた（トラウマ）。女装した姿を見たクラウスが鼻血を出してしまうことが当時はしばしばあった。（笑）

実力はオリヴィエ、クラウス、イクスが束になっても敵わない程。武器はアームドデバイスの《エクスカリバー》。

デバイス名：エクスカリバー

種類：アームドデバイス

能力：不可視の剣 インビジブル・エア 風王結界、アウアロン エクス（約束された）カリバー（勝利の剣）、全て遠き理想郷

備考：エクスカリバーは元々伝説の聖剣として祭壇に祭られていたものをアルトリウスが抜いた。其の力は現代では《ロストギア》として危険視される程強力なデバイス。  
しかしアルトリウスは大抵は風王結界インビジブル・エアしか使わないので、本当の力は本人しか分からない。

名前：アリサ・バニングス

性別：女

年齢：19歳

出身世界：第97管理外世界《地球》

好きなこと／人：鍛練、ティータイム／アルトリウス、すずか e t  
c  
.....

嫌いなこと／人：だらけること／真面目に行動しない奴、他はアルトリウスと同じ。

デバイス：ソルブレイズ  
(インテリジェントデバイス)

魔力光：紅蓮

術式：ミッドチルダ式

レアスキル：炎熱変換

備考：第97管理外世界《地球》の海鳴出身でバニングス家の令嬢。すずかと大学へ向かう途中、管理局員に襲われていた所をアルトリウスに救われた。其処で管理局の闇を知り、アルトリウスに以後同行。

戦闘力はアルトリウスには及ばないが機動六課の面々には負けない。

因みにランクは《SSランク》

デバイス名：ソルブレイズ

愛称：ソル

AI：男性

種類：インテリジェントデバイス

能力/技：炎熱強化/紅蓮一閃(紫電一閃と酷似、威力は紫電一閃の2倍)、獄炎一閃(火龍一閃と酷似、威力は火龍一閃の2倍)、AMB(砲撃魔法。ハートミックブレイザー)威力はなのはのSLB(ハスターライトブレイカー)の1/5倍)

備考：性格はやや情熱的。得意なことは性格に反して状況判断や分析が得意。アリサ達に的確にアドバイスするしっかり者のデバイス。すずかのデバイス『ルナ』とは兄妹機。

デバイスの特徴はシグナムのレヴァンティンの柄の部分の赤色。

名前：月村すずか

性別：女

年齢：19歳

出身世界：第97管理外世界《地球》

好きなこと／人：鍛練、ティータイム、猫と戯れること／アルトリウス、アリサetc……

嫌いなこと／人：人や動物を傷つけること／人や動物を傷つける人、  
後はアルトリウスと同じ。

デバイス：ルナエンペラー（インテリジェントデバイス）

魔力光：蒼

術式：ミッドチルダ式

レアスキル：投影（Fateのアーチャー）・幻影（ポケットモンスター  
のゾロアやゾロアークの能力）

備考：アリサと同じ第97管理外世界《地球》の海鳴出身で月村家の  
令嬢。

アリサと一緒に大学へ行く途中、管理局員に襲われて同じくアルト  
リウスに救われる。同時に管理局の闇を知り、アルトリウスに同行。  
吸血鬼故か身体能力が高く、もしかしたらオリヴィエやクラウスと  
タメを張れるんじゃないというぐらい接近戦が強い（アルトリウス談）。  
レアスキルが強力で後方支援や情報収集が得意。

因みにランクは《SSランク》

デバイス名：ルナエンペラー

愛称：ルナ

AI：女性

種類：インテリジェントデバイス

能力/技：演算補助（レアスキルの投影や幻影には演算処理が必要  
な為。しかしすずかはIQが高い為、余りルナには頼らない。）/  
月影（霧の様に消え、背後から斬り付ける。）、燕返し（まんまF  
ateの佐々木小侍郎の燕返し）、KEB（砲撃魔法。ハカオス・  
エンド・ブレイカー）4つの魔法陣からエネルギーがすずかの前に  
集まり、なのはのSLBハスターライトブレイカーの要領で放つ。  
威力はなのはのSLBハスターライトブレイカーのなんと3倍！  
なので滅多に使わない。てか使えない。被害範囲的に？）

備考：性格はお転婆。だけど気に入らない相手にはとことん冷酷。  
でも仲間のことになるととっても優しいお姉さんキャラに…。

デバイスの特徴は砲撃時がはやてのシユベルトクロイツが金色の部分が銀色、持ち手の部分が青色。ミドルレンジ時が佐々木小侍郎の物干し竿。

アリサの『ソル』とは兄妹機。

## キャラクター設定Part1（後書き）

今回はアリサ&amp;mp;すずかVSなのは&amp;mp;フエイト（途中参加）をお送りします！



どうして《運命》って残酷なんだろう？

《魔法少女リリカルなのはStrikers とある騎士王の物語》  
《始まります。》

前回のあらすじ

さあなのは、私達相手に何処まで出来るのか楽しみだわ  
々頑張りなさいよ？

精

Outside

54

アリサ「フレイムランス！」  
ソル「フレイムランス！」

アリサの炎の槍がなのはに向かう。其れになのはは冷静にアクセル  
シューターで対応する。

しかしなのはが少し目を離れた隙にすずかは姿を霧の様に消す。

なのは「っ！何処に

！？」

シュンツ！ズバツ！

なのは後ろに気配を感じて咄嗟に回避する。次の瞬間、数秒前に自分が居た所を青髪の女性が斬り付ける。

あの時回避してなかったと思うと……なのは頬を汗が伝う。

すずか「へえ？さっきの技、初見で見破られるとは思わなかったよ

」

青髪の女性は驚いた様に、しかし余裕そつに公言する。

すずか「流石なのはちゃんだね？」　ボソッ

なのは「えっ？」

なのはすずかの呟きに反応する。

アリサ「考え事とは余裕ね？」

なのは「っ！？」

RH「プロテクション！」

ガキンツ！

アリサはそんななのはの隙を見逃す筈も無く、一気になのは目がけて斬り付ける。なのははレイジングハートの咄嗟の判断で何とか防ぐことが出来た。

しかし今の状況はなのはにとってよろしくない。たとえ《エース・オブ・エース》のなのはでも2対1はキツイ。しかも其の相手が《SSランク》∴其のうえなのはは2 / 5ランクダウンの《AAランク》だ。

キツイだけでは済まされない状況だ。

徐々になのはのシールドに罅が入る。「このままでは」  
「なのはが思った時、金髪の女性がおもむろに後退した次の瞬間、其の場所を金色の魔力球が穿っていった。」

？「なのは、無事？」

其処には親友の 流れる様な金髪をツインテールなしたフェイトがなのはとアリサ達の前に立ち塞がった。

フェイト「管理局本局 執務官、機動六課ライトニング分隊長、フェイト・T・ハラオウン∴。貴女達を逮捕します！」

なのはSide

フェイトちゃん…！

なのは「フェイトちゃん来てくれたんだ…！」

フェイ「うん…。間に合って良かった…。けど…」

なのは「うん…。この人達 強いよ？」

フェイ「でも私となのはが一緒なら…！」

なのは「きつと大丈夫…！」

そう…。私とフェイトちゃんが一緒ならどんな相手だって

「余り嘗めないで欲しいわね？」

『!?!?』

其処には赤色の魔力の衣を纏った金髪の女性が立っていた。

p. 104 105  
すずか Side

アリサ & am

しまったわね……。

まさかフェイトが来るなんて……。予想はしてたけど……。

すずか【どうする？アリサちゃん。】  
其処にすずかが捻話で話し掛けて来る。

アリサ【まあ？2対1が2対2になっただけだし…其処にまだまだ  
余裕でしょ？すずか。】

すずか【まあね】

アリサ【じゃあ……】

すずか【一気に……】

アリサ& a m p・すずか

【往きますか！】

私はフェイト、すずかはなのはを相手する。

フェイ「貴女達は誰？何の為に戦ってるの？」

アリサ「私達はただ……」

すずか「貴女達があの人に行くのを足止めしてるだけだよ」

フェイ「……其の声 まさか」

アリサ「止まったらただの的よ…！フレイムランス！」

ソル「フレイムランス！」

フェイ「くっ！」

アリサ「だから言ったでしょう？止まったらただの的だって！」

私は間髪入れずにフレイムランスを撃ち続ける。

其の最中私はなのは達に問い掛ける。

アリサ「ねえ？機動六課の二人さん。貴女達は何の為に戦ってるの？」

フェイ「其れは私達正義の管理局員が、貴女達犯罪者を捕まえる為…！」

せしほ「……」

すずか「なのはちゃん、フェイトちゃん……やっぱり貴女達は間違ってるよ……。」

『其の声……？』

すずか「ねえ2人共……？」

そう言っすずかは仮面を外した。

嘘……でしょう？

なのは「すすか……ちゃん？」

そう……。其処に居たのは、親友の1人のすすかちゃんだった。

じゃあ！？

なのは「貴女は……アリサちゃん……？」

せめてもう1人は もう1人は……！

だけど其れは



違っただって思っていたのに

アハハ



「アリサ、正解よ？なのは……。」



《運命》って残酷なんだろう？



望んだ再開は望まぬ再開に…。

m e m o r y . ú

友と友 悲しみの果てに (前書き)

収束魔砲の詠唱 ?

主人公は次回出します。

memory 友と友 悲しみの果てに

前回のあらすじ

「すずか……ちゃん……？」

「正解よ？なのは……。」

どうして《運命》って残酷なんだろう？

なのは&amp;フエイトSide

そんな……。2人共……

なのは「嘘 っつて、言っつてよ……！アリスちゃん！すずかちゃん！信じられない……。信じられないよ……。！アリスちゃん達がそんな……。」

フエイ「どうして アリサとすずかが此処に居るの？」

フエイトちゃんが私と同じ疑問をアリサちゃん達に投げ掛ける。  
するとアリサちゃんが口を開く。

アリサ「なのは、フエイト…さつきも聞いたわよね？『何の為に戦ってるの？』って……。フエイト 貴女は確かこう言ったわよね？『私達正義の管理局員が、貴女達犯罪者を捕まえる為…！』って…。じゃあ何…！？」

アリサちゃんが声を張り上げる。

アリサ「私達は正義の管理局員に襲われたって言うの…！？」

えっ…？其れってどういふこと…？

なのは「待って！アリサちゃんの言ってること、本当なの？」

アリサ「本当よ！！私達は確かに聞いたわ！『我々は時空管理局だ…。大人しく付いてきて貰おう。』って…！」

フェイ「アリサ 管理局はそんなことしない。何かの間違いだよ…。」

そう！何かの間違いだよ！管理局がそんなことするわけ…………

アリサ「…………間違い？間違いですって!？」

『!?!?』

何？この感じ…………。

アリサ「そう…………そうなのね？分かったわ…………だったら此处で貴女を貴女達を倒す…………!！」

そう言っつてアリサちゃん、すずかちゃんはデバイスを構えた。

なのは、フェイト…それが貴女達の答えなのね？  
なら

アリサ「だったら此処で貴女を 貴女達を倒す……！【すずか、行けるわね？】」

私は捻話ですずかに話し掛ける。

すずか【うん。大丈夫だよ…。私も許せない 管理局のことも…。  
なのはちゃん達のこと…。！だから…！】

アリサ【ええ、だから行きましょう。】

すずか【そうだね……。】

再び私はフェイトに、すずかはなのはに向かって行った。

アリサVSフ

フェイト

アリサ「フレイムランス！」

ソル「フレイムランス！」

私は何度目か分からない炎の槍を何発もフェイトに向かって撃つ。

フェイ「くっ！…アリサ！」

BD「ソニックムーブ」

フェイトは私の攻撃をかわしながら、高速移動魔法で私の後ろに回り込む。

けど…！

アリサ「甘いわフェイト！獄龍 一閃！」

私は後ろに回り込んだフェイトを振り向きざまに獄龍一閃で斬った。

フェイ「えっ？きゃあ〜！？」

いきなりのごとでフェイトも対処出来ず思いつきりぶっ飛んで行った。

すずかVSな

のは

なのは「ッ……。」

なのはは痛みによるめく。

すずかは見た目に寄らず接近戦が得意である。たとえなのはが接近戦を避けて遠距離から砲撃を当て様としても、『月影』でいきなり後ろから斬り付けられる、といった感じで中々自分の真価を発揮出来ないでいる。

バインドで動きを止めて攻撃しようとしても、まず動きが速くてバインドが決まらない。

なのははフェイトの様にオールマイティーではなく、攻撃方法を全て砲撃魔法に頼っている。《エクセリオンモード》の《A・C・E・ドライブ》の様な特効もあるが切り札に近いものだし…そもそもラックを落としている状態での発動は困難になる。

徐々に体力が削られて行くなのは。

なのは「ハア…ハア…ハア…ハア…ハア…ハア…すずかちゃん……。」

なのはは「どうしてこんなこと…。」「というような表情をしている。

すずか「なのはちゃん……。『どうしてこんなことを』って顔だね？ さっきも言ったよね？管理局に襲われたって…。けど…！なのはちゃん達は信じてくれなかった！……きつと間違いだって…なのはちゃん達が正しいって信じたかった…！信じたかった…けど無理だった…。私達は襲われて……恐かった…恐くて…怖くて……信じたものに裏切られて…なのはちゃん達にも裏切られた…！」

なのは「……………」。

なのはは掛けるべき言葉が見つからないのか黙ったまま。

すずか「だからなのはちゃんには　もう一度堕ちて貰おうかな？」

すずかの周りに魔力が集まって行く。

すずか「蒼神終焉……全てを滅する光と為せ……！カオス・エンドー  
ー……！！」

なのは「ッ！不味い！レイジンググハート……！」

RH「オールライトマイマスター。スターライトブレイカー……！」

なのは「全力全開……スターライト……！！」

『ブレイカー……！！！！！！！！！！』

蒼と桃色の光が2人を中心にぶつかり合う。

なのは「うっ……」

だが直ぐにSLBが押され始める。元々すずかの収束魔砲の方がなのはの収束魔砲より威力が高く、なのははろくにチャージ時間も得られなかったのも……さらになのはは2.5ランクダウンの《AAランク》《SSランク》のすずかに勝てる訳が無かった。

そしてすずかのKEBはなのはのSLBごとなのはを呑み込んでいった……。

エイト

アリサ「すずか あれを使ったのね…?」

あれとはもちろんKEBのことである。  
目を凝らすまでも無く其の蒼い光が桃色の光を呑み込んでいくのは  
はっきり見えていた。

(さて……)

アリサ「フェイト 早く来なさい。アンタがまだ平気なことは分か  
ってるんだから…。」

少ししてフェイトが此方にやって来る。

フェイト「……………」。

フェイトは黙ったまま。

なのはが墮とされたことをフェイトはどう思っているのか…?

アリサ「さあ、此方も終わりにしましょう？お互いの最強の魔法で……」

フェイ「うん。そうだね……バルディッシュ……」

BD「イエッサー。ザンバーモード……」

フェイトの想いを受け、《サイズフォーム》から《ザンバーモード》に切り替える。

両者からは尋常じゃない魔力が収束している。アリサはともかくフェイトはなのと同じく、《AAランク》まで落としている。其れでもフェイトからは凄まじい量の魔力が溢れている。

アリサ「炎王咆哮 其の咆哮は全てを燃やす力と成る……アトミック  
……………」

アリサは剣を両手で前に突き出し、其処から尋常じゃない大きさの魔法陣が出現する。そして其処から炎の魔力が溢れ出る。



フェイ「くっ！」

やはりランクを落としている所為かどんどん押し負けていくフェイ  
トのPZB。プラズマ・サンバー・ブレイカー

アリサ「是で……終わりよ……！ハア……！……！」

アリサは更に魔力を籠める。

フェイ「なのは コメン……！」

そう呟いてアリサの収束魔砲に呑み込まれていった。



『 想いだけじゃ 何も護れないないから……。』

m e m o r y . ú

友と友

悲しみの果てに（後書き）

連続投稿：？

次回

《騎士王の実力》

『貴女達が彼らの……。良い目をしている……。』



memory:4 騎士王語る(前書き)

思うままに書いてたら6ページも…!。(。? )

設定が無茶苦茶だ〜!?

後よろしければ、活動報告の募集の方もお願いします!

《魔法少女リリカルなのはStrikers とある騎士王の物語》  
《語》 始まります。

前回のあらすじ

アリサはフェイトに、  
すずかはなのはに、自らの想いをぶつけた…。

果たして其の想いはなのは達に届いたのか。

アルトリウスSide

(アリサとすずかは大丈夫でしょうか？相手は少なくとも管理局内では《エース・オブ・エース》と称される『高町なのは 一等空尉』と管理局では《金色の死神》、《管理局のカリスマ》等と呼ばれている『フェイト・T・ハラオウン 執務官』)。

ランクを落としているとはいえ、彼女達は強い…。  
実力だけじゃない 心も…。(

アル「あれですね……。」  
アルトリウスの視界の先にはガジェットと……。其れと戦うFWメン  
バーが映っていた……。

「FWメ

ンバー視点」  
スバルSide

私はスバル！『スバル・ナカジマ 二等陸士』。相棒のティアナ  
『ティアナ・ランスター 二等陸士』とガジェットを倒してる  
所！

ティア「スバル！何ぼさつとしてんの！もっとしゃきつとしなさい  
！」

うっ！ティアが厳しいよ（T T）

ティア「何不貞腐れてんの？サッサと終わらせるわよ！」

フツ ツンデレめ

（  
—  
+  
）

ドカツ！

スバル「ツ~~~~！！？」

ティア「今失礼な事考えてたでしょう？」

鋭いよ〜ティア〜！（泣）

？「スバル〜、ティアナ〜！そっちは終わったですか？」

あっ！

スバル・ティアナ  
『リイン曹長!』

今のは『リインフォー・スツヴァイ 空曹長』。

見た目が何か妖精さんみたいで可愛いんだよ

リイン「む〜!? スバル、何か失礼な事考えてましたね〜?」

ぬっ! 鋭い…!

私達が楽しく会話しているとシャーリーさんから緊急通信が入る。

なんだろう?

シャー「リイン曹長! スバル、ティアナ! 気を付けて! そっちに《騎士王》が向かってる!」

『《騎士王》!?!?』

《騎士王》って最近有名な、S級次元犯罪者《騎士王》、!?

シャー「来ます！」

？「お話し中の所悪いのですが、レリックを渡してください。」

声が出た方を見ると其処には銀色の騎士甲冑を身に纏った騎士王が姿を現した……。

S i d e

アルトリウス

私は3つの魔力反応を感じたので其の場所に行ってみると其処には3人(?)の女性が楽しく会話しているのを見て話し掛けることにしました。

アル「お話し中の所悪いのですが、レリックを渡してください。」

まあこの3人が持っているとは限らないんですが……。其れに……

アル「おや？貴女達は……。」

私は“彼らが”よく話していた女性が居るのを見てつついっい呟いて  
しまいました。

あつてもこんなこと言ったら

スバル「えっ？私達のこと知ってるの!？」

案の定そんなことを聞かれてしまいましたよ……。

アル「いえ、私の知り合いがよく貴女達のことを話していたので何  
となく……。」

ティア「……………」。

オレンジ色の髪の女性は何故か此方を“じく”っと見てくる。  
おっと彼女は結構、勘が鋭いんでしたね。“彼が”よく言ってます。  
た。

『奴の勘の鋭さは凄いです！』と…。  
だから気を付けることにします。

アル「其方の貴女も“彼女”の言っていた通り、元気な方ですね？」

スバル「彼女…？」

おっと！危ない危ない…。またまた口が滑ってしまいました。  
フツ…よくオリヴィエ達にも言われました。  
『貴方はもっと自重してください！』と…。  
私はちゃんと自重してますよ？（自覚無し）

アル「話しが逸れましたが改めて言います。レリックを渡してください。  
さい。」

私が再度、彼女達に言い伝えます。するとどうでしょう？ 彼女  
達の雰囲気が一瞬で変わります。

流石は機動六課ですね？ 対処の仕方も管理局の上の奴らとは違いま

す……。  
こんな人達が管理局にもつと沢山居たら良いと思うのは私だけで  
しょうか？

ティア「貴女の目的は何ですか？」

やはりそう聞いて来ますか……というか……！

アル「前以て言っておきます。私は“男”です。断じて女性では無  
く“男性”です。“貴女”では無く“貴方”です。良いですか？も  
う一度言いますよ？私は“男”です……。」

私にとってはとっ……でも大事な事なので4回程  
言わせて戴きました。えっ？溜めすぎですって？ 何を言います  
か！？私にとっては死活問題なんですよ！この容姿の所為でオリヴ  
イエやイクスに何度も何度も女装させられて……。私がどんな思いで  
過ごしていたと思ってるんですか！？貴方たちはいきなり手を“ワ  
キワキ”させて迫って来る女性が怖く無いんですか！？私は怖かつ  
たですよ！何なんですかあれは！？恐怖対象以外の何物でもありま  
せんよ！！  
ハアハア……

ティア「あの何かすみません……」

フウ「少し取り乱してしまいましたこの《騎士王》とも在るう者が……」

アル「いえ、気にしないでください。解ってくれたなら良いんですよ 其の代わり貴女達に聞きたいことが……貴女方の中でレリックを持っている方はいらっしゃいますか？」

スバル「いえ……私達は「スバルさ〜ん!!」……キヤロ!？」

鉢巻きの女性「もといスバルが自分達は持っていないと伝え様とした時、其処にピンクの髪をした女の子と赤髪の 槍の様なデバイスを持った少年がやって来た。」

其れに……

アル「レリック ですか……。」

対象を見つけることも出来ましたし……。

アル「其処のピンクの髪の毛のキミ？其のレリックを渡して頂けますか？」

キャラ「えっ？あの……。」

リン「キャラ！其れは渡しちゃ駄目ですう！」

キャラと言う女の子が迷ってる所にリンと言う妖精の様な女の子が止めてます。

まあ賢明ですね。

アル「ならば力づくで奪うまでです……！貫け！シャイニングダガー！」

私は光の短剣『シャイニングダガー』を彼女達に放ちます。

是は“彼女”の技を真似したのですが、威力については上だと自負しています。

シャイニングダガーを彼女達の手前に着弾させ視界を塞ぎます。

是で……！？

スバル「うおー！リボルバー キヤノン！」

突然スバルが煙の中から飛び出して来て右手に籠めた魔力を私に向かってぶつけて来ます。

アル「危ないですね…？」

私は其れを不可視の剣《インシブル・エア風王結界》で躲す（いな）。

ティア「ヴァリアブル シュート！」

バシユツ！バシユツ！

おっと！

アル「是は……………」。

是は“彼が”よく使用している技と同じもの。

アル「やはり彼と同じ技を使いますか…」。

ティア「！？其れはどういうことですか!？」

アル「彼を知っているからですよ…」

ティア「兄さんは!…兄さんは生きてるんですか？」

アル「すみません 教えられません…」。

やはり彼女は“彼”のことにに関して何か有ったみたいですね？

ティア「だったら貴方を捕まえて聞き出してみせる…!」

アル「焦り過ぎは余り良くありませんよ？」

ティア「其れでも…!」

アル「少し眠っててください…。」

瞬時に彼女の後ろに回り込み首に手刀を入れ、眠らせる。

スバル「ティア！」

アル「貴女もです、『スバル・ナカジマ』…。」

スバル「えっ？うっ！…！」

ドサッ

アル「夜天の書の管制人格 貴女はどうしますか？」

リン「私は『リンフォース？』って言う名前がちゃんどあるんですう！」

アル「其れはすみません…。やっぱり貴女は彼女とは違うんですね…？」

リン「彼女とは誰のことですかあ？」

アル「其れは貴女の元となった女性のことです。」

リン「其れってお姉さまのことですか!？」

お姉さま　ですか……

アル「そうですね…確かにそうとも言えますね…。」

リン「貴方はお姉さまのことを　知っているですか…?」

リンがおずおずといった様子で聞いて来た。

アル「ええ…よく知っています…。《ヴォルケンリッター》のこと  
も　とても……。何せ彼らを　夜天の書を作ったのは私ですから…。」

この言葉を聴いて、この場には居ない者が息を飲む声が聞こえてきた様な気がした。

アル「さあ、おしゃべりの時間も終わりです。レリックを渡して貰

います。」

リン「そんなこと させな「ガキンツ！」 なっバインド!？」

私を止め様としたリンは突如として現れた蒼色のバインドによって動きを封じられた。

アリサ「結構てこずってるじゃない？」

すずか「もう 心配したんだよ?」

と其処へアリサとすずかがやって来ます。やはり今のバインドはすずかのでしたか…。

アル「其れは違いますよ。ちょっと話しをしていたんですよ。と貴女達が此処に来たということは…」

アリサ「ええ 倒してきたわ…。」

アル「そうですか……。」

リン「え…アリサちゃん?すずかちゃん?」

アル「ん？」

あー確か居ましたねリン 忘れてました。

アリス「リン……久しぶりね？」

すずか「うん。久しぶりだね、リンちゃん……。」

リン「どうして2人が此処に居るですか！？其れにお2人にリンカーコアは……。」

アリス「最初は無かったわ。でもはやて達の間の書事件がきっかけで私達にもリンカーコアが生まれた。」

すずか「其れが原因で私達は管理局に襲われた。」

リン「嘘です！管理局がそんなことをする訳……。」

アリス「リン……貴女もそんなことを言つのね？でも事実よ……信じられないならなのは達に聞きなさい。」

リン「！？なのはちゃんとフェイトちゃんは！？」

「さすが「其れならさつき倒してきた所だよ」

「リン「そんな……。」

信じられないという風な表情をするリン。

アリサ「さあ もう時間だし…其処のピンクの娘？レリックを渡して貰える？」

アルトリウスが「キャラですよ…。」と言い、アリサが「分かっているわよ…。」と返す。

其れをさすが「ニコニコ」と笑顔で見守る。

キャラ「イヤです！これは渡せません！」

アリサ「そう…。でも だからといって引き下がる訳にはいかないわ！ソル！」

ソル「了解！ カートリッジロード！」

ガッシュンッ！

と音を出して『カートリッジ』と呼ばれるものがデバイスから1本、排出される。其れに比例してアリサの魔力も一時的に飛躍する。



ガシユンッ！

アリスはすずかに援護を。すずかはルナにカートリッジロードを指示。

すずか「 I a m t h e b o n e o f m y s w  
o r d . (我が骨子は抜れ狂う) 」  
小さくそう呟いてすずかは黒弓と1本の剣を投影する。矢では無く  
剣を…。

其の剣を矢の様に引き絞り、剣には恐ろしい程の魔力が籠められる。

すずか「偽・螺旋剣」  
ガラドホルケ

そして射った。ただ其れだけで空気が振動する。

剣は其の真名開放と共に目標に、空気を穿ち、まるで削り取る様にして突き進む。まだ実戦経験が無いエリオ 『エリオ・モンデ  
イアル 三等陸士』には最早音速を超える其れを防ぐこと避ける  
ことも叶わなかった。

リンはすずかのバインドにより動きを封じられ、エリオは同じくすずかの一撃により墜とされ残るはピンクの髪の少女、キャラロ・ル・ルシエ 三等陸士』のみ。  
そして其のキャラロも……

すずか「バイバイ」

又すずかの後ろからの手刀で気絶することとなる……。

~~~~~

アル「是でレリックは確保ですね？」

アリサ「結構時間食ったわね……。」

すずか「うん あの新人の娘達も結構を良かったし……。」

アル「では戻りましょう。」

そして3人は転送魔法でこの場を去った。

しかし3人は知らない イヤもしかしたらアルトリウスは知っていたかもしれない。 今までの出来事を観察していた者達が居たことなど……………

とある場所にて

???Side

クククククッ！素晴らしい…！

？「素晴らしい…。『エース・オブ・エース』、『アルザスの巫女』、『プロジェクトFの残骸』、『タイプゼロ・ファースト』…。

1人の科学者の様な格好をした人物が先ほどの様子が映し出されているモニターを食い入る様に観ていた。それぞれなのはやキャロ、フェイトやエリオ…そしてスバルと順番に視線を移す。しかしこの人物が最も興味を持ったのは次の3人アリサ、すずか、そしてアルトリウスだ。

？「炎熱変換を持ち、あのFの残骸を相手に圧倒して魅せた者 更には『投影』のレアスキルを持つ者…。そして！！」

バン！

とキーボードを叩く其の人物の顔は恍惚とした表情で満ちていた。

? 「この姿 この強さ! 正しく(まさしく) 《騎士王》だ! ! ! !」

? 「《騎士王》…とは?」

と其処へ1人の秘書の様な姿をした女性が現れた。

? 「《騎士王》…其れは古代ベルカ諸王時代において最強 そして最良の王として名を轟かせた人物さ!」

其の人物は「更に…!」と続ける。

? 「其れだけじゃない…彼は当時の人物 『アルトリウス・ペンドラゴン』 其の者さ!」

? 「其れは…! 本来有り得ないことでは…?」

? 「いやそうでもないのだよ。古代ベルカの文献には霸王等は記憶や能力を受け継ぐ例も存在している。しかし彼は記憶や能力等では無い! 当時の《騎士王》として今この世界 時代に存在している! 所謂転生と言う奴さ…。」

? 「そんな非科学的なことが…。」

今までの話しを聞いた目の前の女性は呆然としている。無理もない。確かにそんな非科学的なことが有る訳が無い。憑依や転生は所詮ファンタジーの世界の事象でしか無いのだ…。

？「そんな非科学的なことが有るから面白いんじゃないか！そして彼の聖王が生涯敵わなかった相手でも在る……。」

「実に面白い！」

そう言って再びモニターを操作し始めた……………

『彼の者は騎士王を知る』

memory:4 騎士王語る(後書き)

予告に反してたいして活躍しなかったアルトリウス…？  
すずか  
がパネエ…！

今までの含め、サブタイトル変えました！  
それなりに合ってるか心配です…。

今回はアルトリウスが夜天の書を作った理由が明らかになります。

シグナム姐さんのセリフが多いです！

酸欠帝さん、アイデア有り難うございます！有り難く使わせて頂きます！本当に有り難うございます！！

《魔法少女リリカルなのはStrikers とある騎士王の物語  
《始まります。》

前回のあらすじ

騎士王と2代目祝福の風の出会い　それは何を意味するのだろうか？

そして彼は何の為に夜天の書を作ったのか？

アジトにて

パアア…

此処はアルトリウス達が使用しているアジト。その内のある部屋に

ベルカ式の魔法陣が出現する。

光が治まると其処にはアルトリウスとアリサ、すずかが立っていた。

アル「ふう……。」「

すずか「アルトリウス君、大丈夫？」

すずかはアルトリウスを心配してか、顔を近付けてくる。

フラッ

アル「はい、問題ありません。この通り……」

ポスッ

アリサ「おっと……。全然大丈夫じゃないじゃない！こんなになるまで動き回って……！」

アルトリウスは移動しようとしたら体勢を崩してしまいアリサに体を受け止められる。

「こんなになるまで」  
というのは、今までアルトリウスは殆ど休まず違法研究所を潰して回っていた所為か体力が限界が近かったのだ。  
本人は気付いていないみたいだが今回の戦闘に対して少し動きが鈍くなっていた。

アリサ「それにあんた 大人モード 解除しないでそのまんまじゃない…。」

アル「えっ？ あっそういえば、解除しないままずっとこの状態でしたね。忘れてました…？ 武装形態 解除…。」  
一言そう呟くと彼を光が包み込み光が治まると其処には身長も縮まり、顔も少し幼くなりはしたが先ほどの面影が見てとれる…確かにアルトリウスが立っていた。

アリサ「その姿、本当に久しぶりよね。」

すずか「ホントだね やっぱりこっちの方が可愛いよ〜！」

アル「わっ！すずか！？突然どうしたんですか！？」

いきなりすずかが抱きついてきて私はビックリしてしまいました。

すずか「別にどうもしないよ………？」

アル「……すずか？」

すずか「ッ……ッ！」

泣いて いる？

アル「すずか？どうして泣いているのですか？」

すずか「そんなもの……アルトリウス君が心配だからに決まってるでしょ……！」

えっ？

アル「何故……？」

アリサ「あなたは最近ほぼ休まない、何でも1人で抱え込もうとしてる 心配するのも当たり前よ。」

アル「ですが1人で抱え込んでなんか……。」

?「もう少し素直になりなさいよアルトリウス……。」

私の耳に女性の呆れた様な声が聞こえてくる。

アル「クイントさん ティーダ……。」

声のした方を見ると一組の男女がやって来る所だった。

クイン「もう、こんなに無理して……。」

ティー「ホントだぜ!俺らが居るんだからもっと頼れっの!」

アル「すみませんみんな……。」

クイン「謝るならもうこんなことしないで。約束出来る?」

アル「はい……。」

クイン「よろしい なら今日の所はもう私達に任せて貴方は休みなさい。此処の所ずっと休んでないんだから……。」

アル「クイントさん……。そうですね お言葉に甘えて……。」

そう言って私は部屋を出た。

アル「やはり仲間は良いものですね……」 『もっと俺達を頼れ。』 か  
…。

『もっと我らを頼ってください！』

『アルトリウス もっと私達に頼っても良いのですよ？』

アル「……懐かしいですね……。今になって分かります 貴方達の気  
持ちが……。オリヴィエ クラウス イクス……そして守護騎士達よ  
有り難うございます……！」

その時の彼の顔は何処までも澄んでいた……。

~~~~~アルトリウスが居なくなった部屋にて

クイン「アリサとすずかはどうだったの？親友だったんでしよう？」  
アリサ「そうね……。ランクを落としていた割りには結構楽しめたわ。」

とにこやかにアリサ。

すずか「私はそうだな？あんまり楽しめなかったな……。なのはちやん、攻撃の殆どを砲撃に頼ってる節があるからロングレンジやミドルレンジにはそこそこ強いけどクロスレンジに持って来られると極端に弱くなっちゃうんだよ。主に接近戦用の技が無いことで……。」

126

すずかは真剣になのはの特徴を述べる。やはり親友だったすずかとしてはなのはが心配の様だ……。

クイン「そうなの……。あつスバルはどうだった？」  
話題を切り替える様にクイントはアリサ達に自分の娘のことを尋ねる。

母親としては娘のことが気になるみたいだ……。

アリサ「遠くから見たから良くは分からなかったけれど 結構やるわよ、あの娘…。そこら辺の奴よりは断然強いわ。」

アリサは素直にスバルを褒め称える。

すずか「そうだね。確かに新人にしては動きや対応がしっかりしてたよ。目眩ましにも怯まない所なんて凄かったよ！」

すずかもスバルを褒め称えている。

アルトリウスの居ない所でこんな会話がされていた。

機動六課にて

此処は機動六課。その隊舎の部隊長室では重苦しい空気が漂っていた。

その理由は……………

なのは「アリサちゃん　すずかちゃん…！」

悔しそうな表情をしているのは先の初任務の戦闘ですずかに墜とされた筈のなのはであった。

傍には同じく先の初任務の戦闘で此方はアリサに墜とされた筈のフエイトが居た。

彼女達は墜とされはしたものの、それは魔力ダメージによる気絶で体にこれといった外傷は無かった。

だがそれはアリサとすずかに手加減されたということ。なのは達だつてそれは分かっているだから悔しいのだ…、自分達じゃ親友を止めることが出来ないことに……………。

はやて「アリサちゃん達は管理局員に襲われたって言うってたんやな？」

そう言うってなのはとフェイトに向いた女性はなのはとフェイトの親友のひとり 茶髪の髪をボブカットにした 『八神はやて』だ。

階級は 二佐

フェイ「確かにそう言った…。管理局がそんなことする筈がないって信じたいけど……」

シグ「それが嘘か本当かは判らないか……」

其処にピンクの髪をポニーテールにした目付きの鋭い女性 《烈火の将》シグナムがばやく。(ランクはS-) 階級は 二等空尉

はやて「せや…。だから調べるんや!」

フェイ「調べるって言ったってどうやって……。」「  
そこは誰でも気になるだろう。しかしはやては…」

はやて「そこは無問題や。実は知り合いに査察官がいてな?その人に頼むんや。サボり癖がチヨイ偶に傷やけど……。まあこれは置いといてや。もう一つは……」

と言ってはやてはモニターを操作し、ある映像を映す。

『騎士王……』

はやて以外のみんなが口にする。それもその筈 彼は今ではあの『  
ジェイル・スカリエッティ』と同じくらい有名な犯罪者 《騎士王  
》なのだから。だがそれより気になるのは……

はやて「リインに言った『ええ……よく知っています……。《ヴォルケ  
ンリッター》のことと とても……。何せ彼らを 夜天の書を作っ  
たのは私ですから……。』」  
つて部分やね……。シグナム達は何か知ってるん？」

ヴォルケنز

『……………』

シグナム達は黙ったままだ。

はやて「シグナム？ ヴィータ、シャマル、ザフィーラ？」

はやては尚黙ったままのシグナムを不思議に思いながら同じヴォル

ケンリッターの《鉄槌の騎士》 ヴィータ、《風の癒し手・湖の騎士》 シャマル、《蒼き狼・盾の守護獣》 ザフィーラ達にも聞こうとするがシグナムと同じ様に黙ったままでいる。

.....

どれくらい経っただろうか？暫くしてシグナムがおもむろに喋り出した。

シグ「彼は アルトリウス様は、確かに我らをお作りになられた。勿論其処には“アイツ”も居た……。」

シグナムが言う“アイツ”とは初代リインフォースのことである。管制人格の彼女も又、シグナム達同様にアルトリウスに出会っている。

シグ「私達は何故作られたのだろうか？」 そう思ってアルトリウス様に聞いた所、どんな答えが返って来たと思う？」

フェイ「……どんな？」

このフェイトの質問にシグナム達ヴォルケンリッターの面々は口を揃えてこう言った。

『家族が欲しかったから!!』と。

はやて「家族……。」

はやては何か自分と似ていると感じたのか小さくそう呟いた。  
シグナムはその呟きが聞こえたのか微笑む。

シグ「そうです。アルトリウス様は主と同じ様に親を幼少期の頃に亡くされた…彼には姉や妹も居りましたがその者達も 戦乱の中で命を落としていきました……。」  
そこで一旦間を置き、再び喋り始める。

シグ「アルトリウス様ははやての様に料理も上手く、心が御強い方だった……。ですがアルトリウス様は 1人で全て抱え込もうとする節が有り、中々私達を頼ってくれなかった。それが堪らなく悔しかった…！我らでは…！アルトリウス様を御救いすることが出来ないのかと 悔しさで涙が溢れた…。だがそんな時にあの御方達は現れた……。」

~~~~~回想~~~~~

シグ「何故だ！何故…！アルトリウス様は我らを頼ってはくれぬのだ…！」

初リイン「ああ…そうだな。あの御方は無理し過ぎている。」

シャ「ええ、私達が居るんだからもっと頼って欲しいわ…。」

ヴィー「うん…。」

ザファイ「ああ…。」

他の騎士達も口々に言う。それだけアルトリウスのが心配なのだ…。

？「貴方達は主想いの良い方達なのですね？」

シグ「貴女は…。」

私達の前に現れたのは

後のアルトリウス様にとって初の友となる 紅と翠の目をした女性

オリヴィエ・ゼーゲブレヒト様だった。

オリ「…そんなに悲しそうな顔をしないでください…。私が彼を救ってあげます 必ず…！」

シグ「ッ！本当ですか!？」

私は思わず顔を上げてしまった。

オリ「はい 必ず…！」

何故だろうか？彼女の言葉は信用出来る気がしたのは





それからだ…アルトリウス様が変わっていったのは。ここ最近では見せなくなったあの 初めて出会った時の質問をした時のあの無邪気な笑顔を度々見かける様になった…。

私達は嬉しかった。

あんな風に笑ってくれる様になってくれたことに…。そしてオリヴィエ様の他にも『クラウス様』、『イクスヴェリア様』もアルトリウス様と友になり、何時しかその4人が一緒に居ることが日常になっていった…。

だがそんな日常も長くは続かなかった…。

シグ「嘘…でしょう？ッ！嘘と言って下さいオリヴィエ様！！」

アルトリウス様が亡くなられた。

このことは直ぐに国中に広まった。

私は 私達は信じられなかった。否、信じたくなかった。ヴィータは泣きじゃくり、シャマルが涙を必死に堪えながらヴィータを抱き締める。

ザフィーラは何時も通り無言だったが、彼の手を見ると血が滴れていた。彼は《盾の守護獣》……そんな自分が1人の大事な人も護れないのか そんな風に見て取れた。

私も同じだ……。

我らは守護騎士。主を護るのが使命……。それすら果たせないとは私の心はそんな気持ちでいっぱいだった。

それからだ 我らの人生が狂い出したのは。

夜天の書は本来の機能を失い、ただ悲しみと絶望しか生まない破壊の魔導書となってしまうた。幾度も幾度も 殺して殺して殺して殺し尽くした。

一体何時までこんなことをしなければいけないのかと思っていた時  
出会ったのだ。彼女に 最後の夜天の主に……

~~~~~回想終了~~~~~



memory's

騎士王と夜天の書（後書き）

中途半端な所で終わってしまいすみません！  
ポケモンよりこっちの方が進む…だと！？

次回も頑張りまーす。

memory:6

真実を知った者（前書き）

どうだろうか……。

心配だ……！ 地の文が少ないかも。

後、前話の間違い

二佐 ではなく 二等陸佐 でした！

では《魔法少女リリカルなのはStrikers》とある騎士王の物語《始まります。

memory:6

真実を知った者

前回のあらすじ

なのは達隊長陣は、「自分達は間違っているのか？」 徐々に管理局に疑問を持ち始める。

そしてはやては夜天の書が騎士王 アルトリウスによって作られたことを知る…。はやてはアルトリウスと自分を重ね合わせる。

機動六課にて

はやてSlide

そうだったんや。夜天の書はあの人が……

なのは「『家族が欲しかったから』……か。」

フェイ「うん。良い人なんだね……。」

そうやね……

話しを聞くかぎり悪い人には想えへん。

なのはちゃんとフェイトちゃんは家族関連のことで色々あったらしいから……。尚更分かるんやな。

そんなことを思っていたら突然通信が入った。

カリム「はやて、今大丈夫？」

どうやら相手はカリムみたいやな。

本名はカリム・グラシア。『古代ベルカ式魔法』の継承者で聖王教会・教会騎士団所属の騎士。

彼女とは8年前（闇の書事件から1年後）からの付き合いや。機動六課の設立をする際には尽力し、後見人を務めてくれてもいるし、六課隊長陣のリミッター解除権限も持っているんやで

はやて「大丈夫やよ？それでどうしたんや？」

意識を切り替え部隊長として私はカリムに聞いた。

カリム「私も含めた聖王教会から依頼……。あるロストロギアの確保及び封印をお願いしたいの、頼めるかしら？」

はやて「うーん 分かったよ。で、場所は何処なん？」

別に断る理由も無いので、2つ返事で了承した。

カリム「有り難う。で、場所は……………」

すずか Side

私はあれからある場所に潜入している。

その場所はなんと機動六課。何故そんな所に潜入しているのかと聞かれれば、ただの情報収集だ。

私のレアスキルに『幻影』というものがあり、他の人間や生き物に化けることが出来るんだ。今は鳥に変身して新人達の訓練を観察している。

隊長陣は居ない、新人達による自主トレだ…。

（ふーん…。結構頑張ってるんだね。これならなのはちゃん達が褒める理由が分かる…。素質も才能もある、特にオレンジ色の髪をした女性 ティアナは洞察力に優れていていて参謀としての能力が高い。やっぱりティードさんの妹なだけはあるね…。？ 育て方次第ではかなり化けるね…。）

そんなことを考えながら観察していると何処からかなのはちゃんの声がしてきた。

なのは「FWメンバー集合！今から部隊長から報告がありまーす！」

そう言って今度ははやてちゃんが前に出る。

はやて「さつき聖王教会から出張任務の依頼があつてな？それに私が行くことになったんよ。」

へへそりゃ面白いね？良いこと聞いたよ  
ん？まだ続きがあるみたいだね……。

はやて「で、その場所がな？なんと……私となのはちゃんの出身世界  
第97管理外世界《地球》や！」

！？

（何の偶然なんだろうね、これは……。あの街には何かあるのかな  
？）

はやて「でもな？1つ問題があるんや。」

ティア「問題って何ですか？」

はやて「拠点を何処にするかで困ってるんよ…。」

ああそついでと…。

(はやてちゃん困ってるみたいだね？しょうがない、助けてあげよつか！)

すずか「それなら私が何とかしてあげよつか？」

私はそこで鳥の姿から元の姿に戻る。

『！！！？すずか／ちゃん！？』

FWメンバー以外のみんなが私を見て驚いた。

はやて「すずかちゃん！何で此処に？」

すずか「うーん…はつきり言つと情報収集？」

これは本当だよ？暇だからっていつのもあるけど…。

シグ「何が目的だ…。」

失礼だな〜シグナムさん。

すずか「さっきも言ったじゃないですか、『情報収集』って。」

はやて「それで？何か良い案があるんか？」

すずか「あれ？てつきり捕まえに来るのかと思つてたのに…。どう  
いう心境の変化なのはやてちゃん？」

うん。絶対捕まえに来ると思つてた。これ本当。

はやて「いやな、すずかちゃん達が言ったこと 信じてみようかな  
つて…。」

すずか「ふーん そうなんだ…。」

はやて「なんや信じてないんか？」

すずか「そりゃそうだよ。襲ってきた相手が居る組織の人の言葉なんて直ぐには信じられないよ…。逆に信じる人の方が少ないと思うけど。」

はやて「さつきな？シグナム達から夜天の書は騎士王 いや、アルトリウスさんが作ったっていう話を聞いたんよ。作った理由も…昔はどんな思いで生きてきたのかも…。」

そうか。

すずか「うん！それだけ聞ければ充分。信じるよ、はやてちゃんの言葉。」

はやて「本当か？」

すずか「嘘は吐かないよ。シグナムさん達からってのもあるけど、はやてちゃんの顔を見れば本当なんだなって思うから…。」

はやて「すずかちゃん…。」

すずか「で、さっきのことだけど…私かアリサちゃんの所を使うと良いよ」

はやて「アリサちゃんは大丈夫なんか？」

やっぱり聞いてくるかな？

すずか「それなら大丈夫。今アリサちゃんに聞いてみるから。」

はやて「い、今って……」

すずか「あつ、アリサちゃん？聞きたいことがあるんだけどね？」

はやて「聞いてないし…。」

はやてちゃんが何か言ってるけど無視無視

すずか「『別に大丈夫』？有り難うすずかちゃん！じゃあまた後でね？」

ヨシッ！

はやて「って、何が『ヨシッ!』なんや!？」

おっ？

すずか「はやてちゃん今の良いツッコミだよ？」

はやて「ツッコミとかちゃうわ!！」

ゼーハー、ゼーハーと息を吐くはやてちゃん。  
大丈夫かな？

はやて「誰の所為や誰の!」

すずか「あれ？何で分かったのはやてちゃん。」

はやて「そんなの知らんわ!！」

すずか「そんな怒ってばかりいるとシワできちやうめっ。」

はやて「失礼なこと言わんといて!余計なお世話や!！」

すずか「そんなこと言わないでよ、はやてちゃん。」  
はやて「もうええわ…。」

ええ？つまんない……

はやて「……ハア。で、本当にええんか？」

すずか「うん全然？」

はやて「何故に疑問系……。」

すずか「気にしないで。」

はやて「ッ まあすずかちゃんの提案に乗ろうかな？なのはちゃん達はそれでええか？」

F W 以外『うん／ええ／ああ／おう。』

はやて「じゃあ決まりやな。すずかちゃんはこれからどうするん？」

すずか「そうだな。1回アリサちゃん達の所に戻らないと……。」

はやて「そうか。じゃあほんならな。」

すずか「あれ？追ってこないの？」

はやて「別に追わんよ……。」

すずか「そう？ならじゃあね」

私は転移魔法でこの場を去った……………

アルトリウスSide

んっ？この反応は……………

アル「おや？すずかですか。どうでしたか彼女達は……。」

すずか「うん 結構良い感じだよ？後はなのはちゃん達が任務で海鳴に行くみたいだから拠点として私かアリサちゃんの所の場所を貸してあげることにしたの……。」

アル「そうですね……。」

すずか「あれ？余り驚かないんだね？」

アル「すずかならそうするだろうと思っていたので特には。」

「だってすずかは優しいですから。」

と付け加えて。

すずか「有り難う、アルトリウス君。」

アル「いえ、どう致しまして。…ああ、此方も準備しないですね？」

と楽しくすずかと会話をしながらみんなが戻るのを待っていた……。

m e m o r y : 6

真実を知った者（後書き）

次回は海鳴での出張任務を書きたいと思えますでは。

memory:7

騎士王と烈火の将（前書き）

何か色々とぐたぐだに…。

自分は『NANOHA』のキャラではルーテシア、キャロ、ヴィヴィオ、コロナ、アインハルトが好きです！

たとえロリコンと言われようと好きなものは好きなんです！！

《魔法少女リリカルなのはStrikers とある騎士王の物語》  
《語》 始まります。

前回のあらすじ

カリムからの任務の依頼。その内容はロストロギアの確保及び封印。

場所はなんと第97管理外世界《地球》だった。

騎士王と彼女達は始まりの地にて再び出会う。

そしてそれは1人と4人の1つの再会と成る……

はやてSide

此处は第97管理外世界《地球》。その海鳴市という所にはやて達は足を踏み入れた。

なのは「わぁー！久しぶりの海鳴だー！」

となのはちゃん。

フエイ「此処で私はなのはと出会った場所…そして私が新しい自分を始めるきっかけと為った場所…。」

はやて「私だってそうや。此処から全てが始まった…。」

そうや 此処は私にとって出会いと別れの…終わりと始まりの地でもあるんや。

はやて「もし私の家に夜天の書が無かったらなのはちゃんやフエイトちゃん、守護騎士のみんなとも会えへんかった…本当に懐かしいわぁー！」

スバル「あの…八神部隊長やなのはさんは此処の世界の出張なんですよね？」

はやて「ん？そやよ？」

何を今更……

ティア「此処って確か魔法文化が無いんですよ？」

ああそういうことか……

なのは「まあ私達は偶然が重なってなったもんだし…私は偶々頭に声が響いてきてある時怪我をしたたフレットが倒れてるのを見つけてね？その正体は実は動物に変身してたユーノ君だったんだ」

ティア「その名前 確か無限書庫の司書長の……」

なのは「そつ、ユーノ・スクライア司書長の小さい頃。私はユーノ君と出会って魔法のことを知りレイジングハートと出会ってその時初めて魔法を使って色々あって……」

なのはは少し間を置き、

なのは「そしてフェイトちゃんに出会った……」。

そこでフェイトの方を向く。

フエイ「そうだね。本当に懐かしいよ。」

はやて「まあずっと此処に居るのもなんやし行こか？それと私とフエイト隊長、シグナム達は別行動や。なのはちゃんはこれからあそこに行くんやろ？」

なのは「うん！久しぶりに会っておきたいしね？」

はやて「そか…じゃあ私達は寄る所があるからまた後でな？」

そして私達はある場所へ向かう為、なのはちゃん達と別れた……

……

なのはSide

スバル「なのはさん、あそこって何処のことなんですか？」

キャラ「あっ私も気になります。」

エリオ「僕も気になります。」

ん〜、やっぱりみんな気になるよね……。

なのは「それは着いてからの楽しみ　ちょっと待ってね？」

私はある所に電話を掛ける。

何処にかというと……

?「はい、此方『喫茶店翠屋』です」

なのは「あっお母さん！」

そう、電話を掛けた場所というのは私の実家で今電話に出たのは私のお母さん。

桃子「あら〜?なのはじゃない!久しぶりね?」

なのは「うん！本当に久しぶりだね！で、お母さん今からそっちに行くね？」

桃子「あらそう？じゃあ楽しみに待ってるわ」

私は電話のやりとりを終え、FWメンバー達の下へ。

なのは「じゃあ 行こっか？」

私達は目的地（私の実家）へと向かっていった。

はやてSlide

私達はなのはちゃん以下FW陣と別れた後、ある場所に向かっていった。

その場所とは…？

？「久しぶりね？はやて…。」

はやて「アリサちゃん……………」。

そう 相手はアリサちゃん。で此処はアリサちゃんの所有しているペンションなんや。アリサちゃんもすずかちゃんもお金持ちやからな……………。

アリサ「まあ話しはずかから聞いたからね…好きに使って良いわよ？」

はやて「ホンマか？おおきにな〜アリサちゃん！」

流石は持つべきものは友やな！太っ腹やでアリサちゃん！

アリサ「で？あんだ達はこれからどうするの？」

はやて「そうやな…本当なら此処にはなのはちゃん達が来てサーチヤ取り付けるんもなのはちゃんや新人達のお仕事やったけど、代わりに私達がすることになったんよ。」

アリサちゃんは

「ふ〜ん。。。」と何かを考えている素振りをした後、直ぐ様いつもの顔に戻る。

はやて「なんや問題でも発生したんか？」

アリサ「いえ、私もてつきり先になのは達が来ると思ってたからね。だって新人達も居るんでしょ？それについても込みで挨拶に来るかとはかりね？」

まあそんなんやけど…。

はやて「すずかちゃんからな？此処にアルトリウスさんが来るう言うてたから早く会いたかつたんや…。」

あの時すずかちゃんが転移魔法で居なくなる瞬間、多分私だけにだと思つた。捻話でこつ言つた。

『私とアリサちゃんの他にもアルトリウス君が来るから楽しみにしているよ』って……。

アリサ「そうなの　なら呼んで来ましょうか？」

はやて「ホンマか？ならお願いしようかな？」

アリサちゃんは頷いた後、アルトリウスさん呼びに行くべく、建物の中に入っていった。

暫くするとアリサちゃんに戻ってきて　えっ？

はやて「……子供？」

そう子供や。アリサちゃんが連れてきたのは子供。見た目キヤロやエリオと同じくらいの年齢や。しかし綺麗やな…。まるでお人形さんや。

私が不思議に思っていると

突然シグナム達が「アルトリウス様！」と言って子供の下へ。…

…へっ？

はやて「その子が…アルトリウスさんなんか？」

すると今まで黙っていた子供が口を開く。

アル「はいいかにも私がアルトリウスです。貴女が今の夜天の主な  
のですか？」

はやて「正確には『最後の夜天の主』とか言われてます……。」

アルトリウスさんはシグナム達をじっくり見て何か満足したのか微笑みただ、

「有り難う。」

と頭を下げてきた。

つて！

はやて「そんなことないです！別に頭を下げられなくても……。」

アル「ですが私は勝手に作って勝手に居なくなつた……。そして苦しめた……。」

シグ「それは違います！貴方は何も悪くない。むしろ何も出来なかつた私達の方が……。」

アル「有り難うございます。こんな私を責めないでくれて お礼と言つてはなんです。シグナム……久しぶりに一手よろしいですか？」

シグ「本当ですか！？では、お願いします！」

アル「分かりました。では、『武装形態』……。」

と言った途端アルトリウスさんを金色の光が包み込み、次の瞬間其処にはあの時映像で見た、銀色の騎士甲冑を身に付け、棚引く金色の髪を頭の上で纏めたアルトリウスさんが立っていた……。

シグナムSide

今私は最高の気分だ。

もう会えないと思っていたアルトリウス様に再び会うことが出来、  
更には一手仕合うことが出来る この上ない幸せだ……！

シグ「レヴァンティン、お前はどう感じている？」

私は自分の相棒『レヴァンティン』に問う。

RT「正直に言えば「嬉しい」としか……。私もまさか再びあの方と剣を交えることなどあるとは思っていませんでしたので。」

シグ「そうか……。」

私は視線をアルトリウス様に向ける。アルトリウス様は私の視線に気付いたのか此方に視線を向けるてくる。

（私は今まで主はやてを護れる様に己の力を磨いてきた……。それを今！此処でアルトリウス様に魅せる時！負けるかもしれない だがそれでも良い。勝つことが目的ではないのだから。）

レヴァンティンを上段に構える。

アルトリウスもそれに応えて風を纏わせたエクスカリバーを下段に構える。

両者の視線が交差する  
そして……

アル・シグナム  
『ハアーーーーー！！！』

ドン………！

ぶつかり合った………。

アリサ・すずか・はやて  
Side

此方はモニターにて試合を観戦している3人。結界を張っているの  
で周りに被害が出ることもない。

はやて「どっちも凄いな？こんなに激しいクロスレンジの戦いを見るのは初めてや。」

アリサ「そうね。アルトリウスとまともにクロスレンジで渡り合えるのってシグナムさんぐらいじゃない？多分……。」

はやて「ヴィータだってクロスレンジ得意だよ？」

アリサ「あの子は駄目よ。攻撃する際のアクションがー々大き過ぎるし無駄も多い、そりゃ当たれば凄いダメージになるけど 当たらなければ意味が無いわ。」

すずか「その点シグナムさんは技に無駄も無いし、素早く次の動きに入れる。」

アリサ・すずか

『……でも、それでも彼女は負けるわよ／よ。』

アルトリウスSide

アル「シグナム、強くなりましたね……。」

あの頃とは段違いに強くなっている、本当に……

シグ「はい、私も立ち止まったままは嫌ですから……。レヴァンティン！」

RT「エクスプロージョン！」

ガシユン！

シグナムはカートリッジを1本消費しレヴァンティンに炎を纏わせる。

シグ「往きます！」

そしてシグナムは私へと一気に突撃して来る。  
ならば……！

アル「私にはカートリッジなどはありませんが、受けて立ちまじょう！」

ただ受け止めるのみ！

ガキンッ！

私とシグナムはお互いぶつかり合いつばぜり合いの状態になる。

アル「シグナム…貴女は確かに強くなった。なら私はそれに応えな  
いといけません！」

そこから私とシグナムは何度もぶつかっては剣劇の嵐。それを何回も繰り返して…金色と桃色の光が辺りを彩る。

シグ「…ッ！」

RT「シュランゲフォルム」

アル「……………」。

私はシグナムの連結刃を右へ左へ避け続ける。  
確かに剣尖の軌道は複雑だがまったく避けることが出来ない訳では  
無い。

シグ「…………クッ！」

RT「シュベルトフォルム」

シグナムは瞬時に連結刃を戻し再度斬り掛かってくるのを私は避けることも受け止めることもしなかった。

だが、

シグ「なっ!？」

驚いたのはシグナムの方だった。

何故なら斬られたアルトリウスは風のように消えてしまったからだ。

そして次の瞬間には

アル「終わりです、シグナム……………」。

シグナムの後ろで剣を突き付けたアルトリウスが居たのだった

はやてSide

はやて「な、何が起きたんや……？」

シグナムがアルトリウスさんを斬った筈なのにその斬られたアルトリウスさんが風のように消えたと思ったら気付いた時にはシグナムの後ろで剣を突き付けた状態で現れたんや……………

アリサ「あれは魔力を素体に分身みたくのを作って…要は忍者でいう変わり身の術的なもんよ。」

アリサちゃんの説明を聞いて感心してると……………

なのは「はやてちゃん！」

なのはちゃん達が戻ってきたみたいやな…。

アルトリウスさんやシグナムが戻ってくるのを見て私は結界を解いてなのはちゃん達の下へ歩いていった……………



memory:8

銭湯パニック(前書き)

今回も変な所で終わってます、すみません！

上手い終わり方：アドバイスなどお願いします！

主人公の変身時の台詞はアインハルトを参考にしてます！ごめんなさい！アインハルト好きなんです！

《魔法少女リリカルなのはStrikerS

とある騎士王の物

語》始まります。

memory:8 銭湯パニック

前回のあらすじ

騎士王と守護騎士は再会を喜び合う。

烈火の将は己の力と覚悟を魅せるべく、騎士王に剣を振るった。

試合はアルトリウスの勝利で幕を閉じたのだった……

「銭湯に行きましょう!」

これは八神はやての一言から始まった。

アルトリウスとシグナムの試合も終わり、なのは達も戻ってきて改めて自己紹介等をして（敵同士だけど）、その後何故かバーベキューをすることになり、更に驚くことにアルトリウスがまさかの大食いですバルやエリオと同等かそれ以上の食を魅せていた……  
（この件ですバルやエリオとは気が合う仲間となる。） 食後の後に風呂はどうするかで冒頭に至る……。

アル「銭湯…ですか？」

はやて「そつや！近場に良い銭湯が在つてな、今から其処に行くんやー！」

因みに何故タメ口なのはアルトリウスが「これでも10歳なのでタメ口でも良いですよ。」と言っていたからである。（シグナムだけは頑なに拒否した）

アリサ「ああ、確かに在つたわねそつなの。」

なのは「アリサちゃん、それはないんじゃないかな？」  
と苦笑気味なのは。

フェイ「…私も忘れてた、かな？」

なのは「フェイトちゃん!？」

フェイトの「忘れてた」発言に驚くなのは。

こんなので執務官は勤まるのだろうか？ 果てしなく心配である。

はやて「まあなんや、とにかくレッツゴーやー！」

流石のはやてもこの空気は不味いと思つたのか、持ち前の機転さで

無理矢理変えて魅せた。

アリサ「逃げたわね。」

すずか「逃げたね。」

アル「逃げましたね。」

シグナム「逃げたな……。」

ヴィータ「逃げたよな。」

シャマル「逃げましたね。」

ザファイ「……………」

スバル「逃げたね……。」

ティア「逃げたわね……。」

キャロ「逃げた…よね？」

エリオ「うん、逃げたね。」

はやて「みんな黙りい……！」

人、それを『逃げ』と言う。

そんなこんなで銭湯に到着。早速はやてが受付でお金を払う。

はやて「えー、大人が11人で、子供が……5人と。」

ザフィーラはペット扱いで除外。

なのは達と共に来たアルフ、美由紀、エイミー含む。  
アルトリウスは10歳なので子供扱い。

ヴィー「おい、大人12人で、子供4人だろうか？」

スバル「えっ？ヴィータ副隊長、子供じゃあ……！」

ヴィー「あたしは子供じゃねえ！大人だ……！」

スバル「え、でも子供じい「おいスバル、アイゼンの錆びになりて  
えか……？」……いえいえ！ヴィータ副隊長は大人ですよね……！」

さすがにアイゼンの錆びにはなりたくないのか慌てて訂正するスバル。

会計も済み、それぞれ男女別に別れるという所で、

キャロ「エリオ君、お風呂楽しみだね？」

エリオ「えっ？うん　キャロもなのはさん達と楽しんで来て……。」

キャロ「えっ？エリオ君　一緒に入らないの……？」

エリオをキャロが引き止めるといった事態が起こる。

エリオ「僕は男だし、キャロは女の子だから……。」

こんなに女性が居る中で入る訳にはいかないと思って遠慮しようとするエリオ。

キャロ「うん　だからあれ……。」

と言って指差す先には注意書きの看板が。

『女湯への男児入浴は11歳以下まででお願いします』と書いてあった。

エリオ「……………」。

キャロ「ねっ？」

注意書きの看板を見て冷や汗を掻きまくるエリオにキャロが笑顔で女湯へと連れて行くこととする。

エリオ「あ、あの！皆さんは良いんですか！？僕、男なんですよ！？」

ティア「別に私は良いわよ？」

スバル「てか『前から洗ってあげようか』って言ったじゃん。」

エリオ「…！フェイトさん達は良くないですよね！？」

徐々に追い詰められていくエリオ、今度はフェイト達に助けを求め

アリサ「私は構わないわよ？」

すずか「私も構わないかな？」

エリオ「……………！アルトリウスさんは！？　あれ？アルトリウスさんは…。」

残るはアルトリウスのみとアルトリウスへ振り向くが、其処にアルトリウスは居なかった。



アルトリウス & amp ; エリオ Side

此方はアルトリウスとエリオが居る男湯である。

エリオ「アルトリウスさん！僕を置いて逃げるなんて酷いじゃないですか！？」アル「アルトリウスで良いですよ？…でもあのまま居たら、私も連れていかれる所でしたので。」

そう言つて震え出すアルトリウス。やはり彼は女性に対して色々トラウマがあるようだ……。

エリオ「それにしてもアルトリウスって本当に男なの？どう見ても女の子にしか見えないよ…？」  
エリオがそう言うのも無理はない。何故なら彼はどっからどっ見ても綺麗な女の子にしか見えないのだから。

アル「それは言わないでください。」

エリオ「ごめん。」

やっぱり気にしている様だった。

アル「突然ですがエリオ、貴方は自分が生まれたことに後悔しますか？」

エリオ「！？」 どうして、キミがそのことを」  
アル「ある違法研究所を破壊をしていた時に『プロジェクトF』のことを知りましてね、もちろんフェイトさんのことも」。

エリオ「アルトリウスは、どう思ってるの？」

アル「どう、とは？」

エリオ「僕やフェイトさんは本当の人間じゃない それをキミはどう思ってるの：？」

エリオは震えていた。

自分が拒絶されるのではないか？ 存在を否定されるのではないか？ お前は人間なんかじゃないと言われるかもしれない ただ怖くて震えていた。

アル「何を言っているんですか？貴方は立派な人間です、心配する必要はありません。」

エリオ「 ツでも！僕はクローンで、本当の『エリオ』じゃないんだ：。只の偽物なんだ：！」

アル「エリオ……。」

パシン！

エリオ「！！？」

アルトリウスがエリオの頬を叩いたのだ。

アル「何故貴方は自分の存在を自分から否定するのですか！？ 何故自分を悪く言うのですか！？ 貴方には心があるでしょう！？？ 感情があるでしょう！？？ 何故それを否定するのですか！？？」

エリオ「………………。」

アル「貴方は笑ったり、怒ったり、驚いたり、泣くことが出来るじゃないですか。それは貴方が立派な人間だという証です。」

エリオ「でも…………！！」

アル「エリオ、ならフェイトさんはどうなんですか？彼女を見ていてどう思っていますか？」

エリオ「どうって 言われても……。」

アル「彼女は笑っているでしょう？」

エリオ「!？」

アル「フェイトさんは自分がどういう風に生まれたのか、どういう理由で生まれたのか、それを知っている筈です。それでも彼女は笑顔で生きている……。」

自分には仲間が、親友が居るから……だから彼女は笑顔で前を向いて生きている。エリオにも仲間、居るでしょう？」

エリオ「うん。」

アル「本物や偽物なんて関係無い 理由はどうあれ、其処に存在している、それだけで良いじゃないですか、ねっ？」

エリオ「そう、だね。 ……うん！有り難う、アルトリウス！」

アル「別に私は何もしてませんよ……!？ エリオ、私は先にあげります！」

アルトリウスは急に何か危険を感じたのか風呂からあがるうとするが……

パキンッ！

アル「なっ！バインド!？」

もう少しで出口という所で突然バインドがアルトリウスを襲う。

離れた所ではエリオもフェイトとキャロによって捕らえられていた。

アル「す、すずか…？何故、そんなに目をギラつかせているのですか…？」

そう アルトリウスにバインドを掛けたのはすずかだった。

すずか「それはね？ 今から私達と一緒に混浴風呂へ行くから、だよ」

笑顔でそう言うすずかの顔は笑顔だったが、その笑顔は何処までも黒かった…。

アル「クッ！この程度のバインド……そんな？砕けない!？」

脱出しようとするアルトリウスだが、バインドが強くて思うようにいかない。

アリサ「当然よ。貴方用に掛けたバインドなんだから。」

其処へアリサがやって来る。

アル（無茶苦茶です…！）

エリオ（無茶苦茶だ…！）

男2人の心が繋がった瞬間だった……。

アリサ「さあ！」

すずか・キャロ

『アルトリウス君』

フェイ「エリオ……。」

4人『逝こうか』

アル・エリオ

『字が違……う……！』

「はやて「って何をやってるんや!？」」

アル・エリオ

『はやてノはやてさん!』

絶望だと思われていた状況にはやての通信が入る。

はやて「今、サーチャーに反応があった 直ちに現場へ急行や!」

エリオ「了解! (はやてさん有り難うございます!)」

フェイ「了解。(はやて、空気読もうよ...)」

キャロ「了解! (せっかくアルトリウス君と一緒になれると思ったのに.....)」

キャロは何故かエリオではなく、アルトリウスの名を口にする。

そしてはやての評価はどんどん変わってゆくのだった.....

memory:8 銭湯パニック(後書き)

まさかのアルトリウス・アリサ&amp;mp・すずか&amp;mp・キャロ  
に……

やはり駄目か!?! 駄目なのか!?!

memory:9 少女の新しき日々開幕(前書き)

今回はオリジナルの話。

オリキャラ出ます。

スライム戦は飛ばしました。すみません！

《魔法少女リリカルなのはStrikers とある騎士王の物語》  
《語》 始まります。

はやて達、機動六課がサーチャーの反応がある場所へと行くと、其処にはスライムの姿をしたロストロギアが居た。

そのロストロギアもなんとか倒し、キャラが封印して任務は無事終了了。

はやて「アリサちゃん、昨日は泊めてくれて有り難うな？」

アリサ「別にお礼を言われる程でも無いわよ。私も久しぶりに楽しかったし　ねっ？　すずか。」

すずか「そうそう　元々私達が出出したことだから…。」

はやて「そか…なら私達はもう行くな？」

アリサ「でもまた会ったら私達は敵よ、その時は容赦しないわ。」

はやて「アリサちゃん…。」

すずか「はやてちゃんはやてちゃんの正義がある様に、私達にも私達の正義があるんだよ？　話し合いだけじゃ、相互理解は出来ない…それを覚えておいてね？」

はやて「　分かった。ならうち頑張る…！　アリサちゃん達には絶対負けんよ！　覚悟しときい…！」

そう言い残し、はやて達は転移で去っていった。

アリサ「覚悟 ね…。面白いじゃない…。」  
すずか「嬉しそうだね、アリサちゃん。」

笑みを浮かべるアリサにすずかが言う。

アリサ「嬉しそう、ね。確かにそうかもしれない だってそうでしょう？」

なのは達以外にも、シグナム達とも戦えるのよ？嬉しく無い訳ないじゃない！」

そう言ったアリサの姿はどこことなくシグナムに似ていた。

アル「アリサ、すずか此処に居ましたか。」  
と、其処へアルトリウスがやって来た。

アリサ「あらアルトリウスじゃない、どうしたの？」

アル「いえ、私達もそろそろ時間ですので戻りましょう。クイントさん達から報告もありましたし…。」

すずか「報告って？」

アル「それは戻ってから伝えるそうです。」

アリサ「なら早く戻りましょう。」

アルトリウス達も転移魔法でこの場を去った。

アル「クイントさん、ティーダ、只今戻りました。」

クイン「あらそう スバルはどうだった？」

アル「流石はクイントさんの娘ですね。実力はまだまだですが、彼女はもつと強くなれます。」

ティアナも魔力量は余り高くありませんが、彼女の戦術には目を見張るものがあります。作戦のたて方もしっかりしていて、4人の中では一番相手にしたくない相手ですよ。」

ティー「そうか…俺もつかうかしてられないな！妹に負けるなんて兄として恥ずかしいからな！」

クイン「　と忘れるとこだったわ。アルトリウスこれを見て…。」

意気込むティーダに対し、ふと思い出した様にクイントがアルトリウスに見て欲しいものがあるとモニターを操作してある映像を見せる。

アル「ッ　これは…。」

映像には沢山の子供が人体実験をされている光景が映っていた。無理矢理魔力を注ぎ込まれる子供、薬を投与される子供、カプセルに

浸けられている子供、更には子供同士で殺し合いをしている映像もあつた。

クイン「これは第21管理外世界で行われている違法研究の映像よ

……。」

すずか「酷い……。。」

アリサ「なんてことを……！」

すずかが哀しい表情で、アリサが怒りに満ちた表情でモニターの映像を見ていた。彼女達だけじゃない……私だって怒りの表情を見せずにはいられない。

アル「行きましょう……。一刻も早くこんなこと、終わらせなければ……！」

クイン「そうね 私も元管理局の人間から言わせてもらうと、「何でこんな所で働いてたんだろう？」ってつくづく思うわ。次元世界を護る筈の管理局が逆に世界を脅かして人々を苦しめている……今思うとあれは奴らに嵌められた感じに思うわ。」  
その顔はまるで忌々しいものでも見る様な表情をしていた。

クイントの言う「あれ」とは、彼女は戦闘機人プラントへの突入捜査の任務の際、事件に関する秘密を知ってしまい、口封じの為にスカリエッティ率いるナンバーズに部隊ごと抹殺されたのだ。

しかし任務の指示を出したのはレジアス・ゲイズ 今の地上本部の最高責任者のもので管理局とスカリエッティが繋がっていたことが判明。だが自分以外の者は皆やられて自分も死ぬのかと思っていた時、偶然やって来たアルトリウス達によって助けられたのだ……。

「すずか「うん。自分達さえ良ければ誰が苦しもうが平気なんだよ…。」

「アリサ「最低な組織ね…！」

「アル「行きましよう皆！」

「クイン「そうね！」

「すずか「うん！こんなこと、許しちゃいけないよ！」

「アリサ「そうよ！絶対に許す訳にはいかないわ！」

「ティー「俺も元管理局員としてこんなこと、許せねえ！」

「アル「では行きましよう！」

私達はそれぞれの決意を胸に、違法研究所の在る管理外世界フリージアへと向かった。

???Side

私は誰　　？

此処は何処　　？

私は何をされるの　　？

痛い！  
苦しい！

痛い痛い痛い痛い痛い！  
苦しい苦しい苦しい！

誰か！誰か助けて！！

そう叫んでも誰も助けてくれない……  
私はもう死ぬの？

そんな諦め掛けた時、突然私の視界に金色の光が差し込んだ

アルトリウス Side

私は転移魔法で管理外世界フリージアに着いて直ぐ様違法研究所へと向かい、先ず其処に居る研究員を殺す。殺すことに戸惑いが無いと言えば嘘になるが、それでも私は生前の頃は人を殺し尽くした。だから私は躊躇無く研究員達を斬り殺していった。

全ての研究員達を排除した後、まだ生きている者は居るか探したがほとんどの子供達は既に息を引き取っていた。

アル「…クツ！まだ生きている者は…！誰か居ますか！？居るのなら返事をしてください！」

呼び掛けながら歩いていくと1つのある頑丈そうな扉を見つけた。

アル「この扉は…。もしかしたら中に誰かが居るかもしれない…！貫け！シャイニングダガー！」

私はシャイニングダガーで扉を破壊します。中を覗くと其処には1

人の少女が光の無い目で私を見つめていた……

???? Side

私の前に綺麗な女性が立っている。

「貴女は 誰？ どうして 此処に 来たの？ 貴女も、あの人達と同じ？」

私の質問に目の前の女性は少し考えてから、

「私の名はアルトリウス、此処に来たのは貴女を救う為です。因みに貴女の言う『あの人達』とは違いますよ？」  
と、ひとつひとつ丁寧に答えてくれた。

「私を、此処から出してくれる の？」

「はい もし貴女が良ければ、私と一緒に来ますか？」

「良いの？」

「ええ。私の他にも仲間が居ますので楽しいですよ。だから、此処から出ましよう？」

そう言つてその人は私に手を差し伸べてきた。

私はその手を掴んだ。

その手はどこまでも優しくくて

どこまでも暖かかった。

因みに後で聞いたところ、彼女は男で私と同じ年齢の子だった。でも、格好良かったな…… / / / / /



memory 少女の新しい日々幕開け(後書き)

オリキャラの設定どうしよう?—応考えてはいるけど……。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8487v/>

---

魔法少女リリカルなのは StrikerS とある騎士王の物語

2011年8月26日07時01分発行